

フィールド風

(現場)からの風

宮田守男

平成2年から放送されているNHKラジオ深夜便「誕生日の花」は、季節や放送にふさわしい「花と花ごぼ」を番組が独自に選定。

今日はミカン科のキンカン、「花ごぼ」は思い出だ。今日の花言葉は何かと気になり知人が送ってくれた令和5年版「誕生日の花」カレンダーを見るのが毎日の日課だ。花言葉は実に多彩で、前向きな花言葉に心驚かされる。日々の生活に花を愛でて生活するのも美に感じられるものだ。

だが毎月届く電気、ガス料金が毎年高騰している。わが家でも対前年約40%近い金額の請求額に驚かされる。何とか減額できないかと毎日の生活での電気やガスの使用方法での

対策を考えてしまう。これまでの当たり前前の生活が、電気やガスに支えられて本当に豊かになっていたのだろうか。と痛感する。

昨年10月に開催された国際高血圧学会で東京工業大の海塩渉助教

最低室温での生活を 守る事が求められている

伝えた。世界保健機関でも「住宅と健康カイドライン」で寒冷な季節に人々の健康を守るための安全までバランスの取れた最低室温として18度を強く勧告しているとも。

の「高血圧や循環器の病気は生活習慣病として広く知られています。が、住環境による生活環境病として捉える必要がある」「日本人の多くは、寒すぎる部屋で暮らしている」との講演内容を朝日新聞が

高齡化が進み高齡者

は疾病を増やし医療費を激増させる。単なる急場しのぎの支援だけでなく、断熱改修などの住環境の整備に思い切った支援が求められている。

世帯や高齡の1人暮らし世帯では国民年金の受給額では最低室温を保つ生活は困難な状況にある事は明白だ。そして生活弱者も同様な局面に置かれている。命を守る事は当然。極めて劣悪な生活環境で

「いわれる「慣れ」だ。当たり前すぎる抽象的な言葉を繰り返し聞かされていると、人間の耳も何とも感じ無くなるように。」「継続事業はやめられない」「財政が厳しくて新規施策はとて無埋」などのマンネリ化した論戦ではなく、日々住民の目



大町病院感染対策状況は、政府が示す「5類」への引き下げにで、どうなるのか不安になる

線に背かず、まずは地域住民と会って話をすることが大切ではないだろうか。
(信州地域社会フォーラム会員・白馬村森上)